

ただで読める文学と思想

ネット依存者の体験による

栞原文和

はじめに

最近十年間の文学や思想にかかわる変化として挙げられることの一つは、インターネットで公開されている、代金を払わずに読むことのできる文章の量が、それまでと比較にならないくらいに増えているということである。

もちろんこの期間には数多くの文学作品や思想書が新たに書かれているわけだが、それらの新しい固有名については既に様々な書籍で論じられ、雑誌で特集されているので（本誌もその一つだ）、ここではそういう固有名ぬきに広い状況の変化について書いてみたい。文学と思想を内容ではなく、読

む形式から検討すると言い換えてもいい。

ただで読める文章が増大しているということが、代金を支払わねば読むことができなかった文章——その中には狭い意味での「文学」や「思想」が含まれる——がこれまで自明の前提にしていた条件・価値観をあぶり出すことになっているのではないか、というのがここでのモチーフである。

プロフェッショナルの書き手とアマチュアの書き手、編集者・出版社が内容を保証した文章と保証されていない文章、収入に結びつく文章と結びつかない文章、といった境界線は自明のものとされてきた。しかし、この後で述べるようにそ

の境界線を維持するのが以前よりも難しくなっている。

もちろん、インターネットで文章を読むことのない人たちは、そういう変化に気づくこともないだろう。読んでいる人でも、ただで読める文章と書籍や雑誌に掲載されている有料の文章を並べて論じる必要性を感じていない人もいるだろう。そんなものは「文学」でも「思想」でもない？

しかし、ここではインターネット上で多くの文章を楽しみ、多くの文章によって様々なことを知り考える機会を得ている自身の体験に基づいて、ただで読める文学と思想の現状について考えていく。

あらかじめ書いておくが、「文学」や「思想」がただで読めることを取り上げるからといって、文章を書き、売ることを収入源とする生活を否定するつもりはない。また逆に、これまで通りに作家・思想家であることを生活と糧とする人々が多数存在し続けるような社会体制を維持すべきと主張するつもりもない。文学と思想を書き読む上での現在の条件が、読み手や書き手を拘束しているということもあるのではないか、ということは考えていきたいのである。文章を売らなければ作家とは言えないのか？　そういう意味で作家とは言えない者の書くものには価値はないのか？

ただで読める、とは

電子データとしてただで読める文章自体は二十世紀にも多

く存在していた。一九九〇年代後半の、普及し始めたばかりのインターネットでも、プロ・アマを問わない様々な人々の書く文章が——いわゆる〈ホームページ〉を自分で作成できる人に限られてはいたが——読めるようになっていた。さかのぼって八〇年代にもパソコン通信では〈クローズドではあるもの〉多くの文章を読むことができた。画像・音声・動画を利用することが困難だった分、逆に文章に頼るところは近年よりも大きかった。

しかし、二十一世紀に入ってからブロードバンド回線や携帯電話の広範な普及、それに「2ちゃんねる」（開設自体は一九九九年）に代表される〈掲示板〉（BBS自体は二十世紀から存在していた）、〈ブログ〉のサービスそれに「mixi」や「Twitter」などの〈SNS〉（ソーシャル・ネットワーク・サービス）が登場した。より多くの文章がインターネット上に容易に掲載できるようになり、同時に容易に読むことができるようになったのが現状である。

自分自身をかえりみても、代金を支払って入手した書籍や雑誌に掲載された文章を読む量が減ったわけではないものの、代金を支払う必要の無い文章をパソコンや携帯電話を用いて読んでいる時間が非常に長くなっているという実感がある（おそらくその分テレビを見る時間が減っている）。

もっとも冒頭で「代金を払わずに読むことのできる文章」という言い方をしたように、そこで読めるものが「文学」「思

想」であると言いつつしてしまうことには躊躇いを感じざるを得ない。自分ではそう呼んでもいいと考えていても、強い反論が来るのではないか、〈ネタ〉としか思われないのではないか、と危ぶんでしまう。

既に「文学」「思想」としての定評を得ている文章がテキスト化されネット上で公開されており、それについては特に問題はない。しかし、「文学」「思想」とは無縁な、そう呼ぶことなどおよそ認容しがたい文章が多く蔓延しているところ、というのがインターネットについて「文学」「思想」の関係者・愛好者の多くが抱いている印象なのではないか。

しかし、その大量のただで読める文章が、従来「文学」「思想」を卓越化し囲いこんできた境界線・価値観をゆるがすようなものではないか、という見通しを持って、冒頭では「文学や思想にかかわる変化」と書いた。

文学や思想は書店などで代金を払って購入して読むことが当然とされてきたわけだし、文学や思想の関係者はそれで生計を維持してもいる。それが当然ではない社会とはどのような価値観のある社会なのか、ということここからは考えていきたい。

念のため、留保条件を

と、目指すところは書いたものの、実際ただで読める文章を取り上げる段になると、まだいくつかの躊躇いを抱かざる

を得ない。

その躊躇いの一つは、インターネットにおいてただで読める文章の中に著作者の権利を侵犯しているものがある、という点である。ネット上の著作権の侵犯と言えば、音楽やテレビ番組・映画などが話題になりやすいが、実際は文章に関しても著作権を侵犯したものが多くある。

利益を得るための意図的な海賊版ではなく、著作権を侵犯しているという意識も無く行われているらしい書籍・雑誌などからの転載、講演会・公開対談・シンポジウムにおける発言の記録をブログやSNSで見かけることが最近多くなっている。興味深く読み進んで、エントリーの最後に行き着いて、転載の量には見合わない簡単な感想を目にする、ということも多い。実際そういうブログのエントリーから有用な情報や観点を得られることも多いのだが、知らないうちに自身も著作権法違反に巻きこまれている場合も多いのである。しかし、引用・参照が容易であることこそメディアとしてのインターネットの特質であるし、フェアユースの範囲内でただで読める文章と、実際は著作権を逸脱しているただで読める文章を分けるのは困難でもある。

ひとまず既存の著作権の考え方を遵守する立場に立って、その範囲内で読めるものについてふれることにし、その後で著作権という前提自体について考察することにする。

もう一つただで読める文章を扱う困難としてあるのは、そ

れらが実際は完全に無料とは言えない、ということである。

インターネット以外を例にすると、たとえばフリーペーパーは長らく民放のテレビ局が用いてきたビジネス・モデルを出版の世界に導入したものである。視聴者・読者から代金を受け取らず、広告主から入る広告料だけを収入とするというモデルである。しかし、実際のところ視聴者・読者は広告主の企業の商品・サービスを購入する際に間接的にテレビ番組を視聴し、フリーペーパーを読むための代金を支払っているわけである。広告料は商品・サービスの売り上げの一部を使っているの、広告を出している企業の商品・サービスをボイコットしない限り、本当に無料で番組やフリーペーパーを享受したことはない。

インターネットの無料のブログのサービスや無料のSNSも広告収入で運営しているところが多い。そのサービスを利用して文章を掲載している者も文章を読む者も、商品・サービスを買うことで間接的に書く・読むための代金を支払っている。また多くの情報が公開されているポータルサイトやニュースサイト、それに企業のサイトも広告・宣伝の効果を前提として読むことができている。

そもそもパソコンや携帯電話でインターネットを利用するためには、プロバイダや携帯電話キャリアに料金を予め支払っていないといけない。これは国立・公立の図書館や小中高校・大学付属の図書施設で書籍や雑誌を読む場合に近いか

もしれない。それらの施設で直接代金を支払うことは無いものの、税金や授業料という形で予め代金を間接的に支払っているわけだから。

この点は社会におけるゾーニングの問題とも関わっている。パソコンや携帯電話を日常的に使用し、それを端末として情報を得ることができるだけ収入を持っている人と、それができない人々の間では、無料の情報・サービスを享受できるかどうかで境界線が引かれてしまっている。

厳密に考えていけば、実際に完全に無料で読めているものなど無い、わけである。

ただ、ブログやSNSを読んでいる人がそのような状況をふまえて代金を支払っているという意識を持っていると言うことは無いだろう。この点については、代金を支払わずにただで読めている、という意識（とも言い難い弱い意識だが）を持って読まれている文章のことを、ただで読める文章、と呼ぶということにしておきたい。

従来代金を払って読む・情報を手に入れるのが当然だったのに、直接代金を支払わなくてもいい方が当然になってしまったという事例は現在も増え続けている。たとえば求人情報誌や不動産情報誌は既にフリーペーパーが主流になっている。その流れでいけば、他の情報誌や娯楽中心の雑誌がフリーペーパーにとってかわれていくことも想定できる。代金を払わなくても同じレベルの文章が読めるのであれば無料の

方を選ぶ、という読者の存在を否定することは難しい。最近の『早稲田文学』のように、フリーペーパーと有料の雑誌を量的に大きく差別化するのも可能だが、質的に有料のものと無料のもの間に差違を作ることは既に容易ではない。

しかし、一方で、これまで無料だったニュースサイトでも、広告収入全般の減少に伴って有料化の動きが起こっている⁽²⁾。現状のようなただで読める状況が維持されるかはわからない。いわゆる「フリー」のビジネス・モデルとかいうものは、インターネットや出版物による広告・宣伝や啓発効果が自明の前提として成り立っている。そのための経費に見合っただけの増収が見こめないということになれば、今の無料のビジネス・モデルはあつさりと消えて無くなりかねない。

実はこの危惧は、前にふれた今のところ無料で運営されるのが当然とされているブログやSNSや匿名掲示板のサービスの存続自体とも関連している。ただで読める「文学」や「思想」を支えているのは、ただで自分の文章を公開できるという条件なのだから。

そう、現在前提としていっていることはいつまでも続くとは限らない。

ただで読める条件

さて、前置きが長くなったが本題に入る。

冒頭で述べたことを繰り返すことになるが、最近十年間の

大きな変化の一つはただで読んでいる（ように感じている）文章の量が膨大なものになったことである。

以前から様々な組織の公式WEBサイトや新聞社などのニュースサイト、同じく様々な個人が運営するWEBサイトがあった。それに加えて、weblogの機能を用いた（ほぼ日記と言ってもいい）「ブログ」、そして同じく日記のように使われることも多い「SNS」が登場した。プロの文章の書き手が多くの文章を無料で公開し、かつアマチュアの書き手が一方で素人っぽい文章を書き溜め、また一方でプロの書き手と比べても遜色のない文章も多く書かれている。

「ケータイ小説」が大きく話題になること自体は一時期よりも減ったが、相変わらず携帯電話向けの小説サイトへの投稿は盛んだし、パソコンにも対応した小説公開サイトがずいぶんと増え、そこに掲載された小説がインターネット上で話題になることも多くなった。それらの小説が無料で読めること自体も重要だが、インターネット上で話題にしている感想や批評もブログやSNSで公開されており、同じく無料で読めてしまうわけである。

これに加えて、日本の「青空文庫」、「プロジェクト杉田玄白」、海外の「Gutenberg Project」のような著作（財産）権の有効期間を過ぎたものをテキストデータ化し、アーカイブとしてネット上で公開しているものもある。

以上のただで読める文章は著作権法上の取り扱いに基づい

て二つに分類できる。

◎著作権の有効期間を過ぎてパブリック・ドメインになったものが無料で読めるようになっていく。

◎プロ・アマを問わず個人がサイト・ブログ・SNSで課金せずに文章を公開している。

実際に文章を読む側からすると、この二つは特に区別無くすべて同じようにただで読めるものとしてとらえられている。それをあえて分類したのは、従来の「文学」や「思想」との関係が一つ一つ違っているからである。

パブリック・ドメイン

ネット上で読める文章には著作（財産）権の有効期間が過ぎたものがある。日本の文章の著作物であれば作者の死後五十年後に著作（財産）権の有効期間が切れる。このことは、近年アメリカやEU加盟国に合わせて七十年に延長するか否かという議論が起ったことで広く知られるようになった。

著作権の保護期間が過ぎた文章は公共財、パブリック・ドメインとして誰にでも利用が可能になる。それを最大限に活用しようとしたのが、前にあげたネット上でのテキスト・アーカイブである。これらのサイトはHTML形式やPDF形式で公開されているために読みやすいとは言えなかったが、最近ではPDFファイルを書籍形式で表示するアプリケーションが様々な端末で開発され、これまでもずっと読みやす

くなっている³。

以前はたとえ著作権が切れた著作物であっても、出版社から書籍として販売されているものを購入して読むしかなかった（前に述べたように図書館等の所蔵品を読むことも無料ではない）。たとえば、様々な出版社が読書感想文の題材としての需要を狙って毎年夏に文庫本のフェアを行っている。そこで選ばれた「百冊」の多くは既に著作権の保護期間が終了したものであり、同じ小説が複数の出版社から装丁や解説・注を異にして発行されている。

しかし、複数の出版社が文庫で発行している夏目漱石「ころ」、芥川龍之介「羅生門」、太宰治「人間失格」といった小説は、テキスト・アーカイブによって本来のパブリック・ドメインとしての活用が可能になった。基本的にボランティアで運営されているこれらのサイトは、今のところ出版社が発売する書籍にとっかわるものにはなっていないが、今後はその状況も変わっていくだろう。

ただで読める文学と思想、という時にパブリック・ドメインになっている文学者・思想家の著作がネット上で公開されているというのは非常になじみやすいイメージである。たとえば「青空文庫」では近代文学の、古いところでは二葉亭四迷「浮雲」や森鷗外「舞姫」から、最近著作権の有効期間が切れた作家では徳永直（一九五八年没）までの様々な作家の作品が掲載されている。「Gutenberg Project」は広いジャンルの

テキストが掲載され、たとえば"Ethica"&"The Critique of Pure Reason"、それに"On the Origin of Species"などを書店で買うこともなく読むことができる。今のところは英語・ドイツ語などが読めなければならぬという条件はあるが、今後無料の翻訳サービスが実用レベルになればずいぶん状況は変わってくるだろう。

著作権の有効期間が終了したものが、これまでも出版社によって書籍として販売されてきた理由は、他に読む手段がなかったという以外にも、本文に付与された注や解説の利便性や、モノとしての書籍を所有する喜びもあるのだろう。しかし、後者はモノとしての側面への執着を持たない人にとっては無効ではないし、注や解説もインターネットの無料で公開されている情報によって代替することは不可能ではなくなるだろう。たとえば注は「Wikipedia」のようなネット百科事典によって補われ、解説はブログやSNSなどに書かれた批評や感想によって取って代わられうる。著作権者自らが文学や思想に関するコメントをインターネット上でブログやSNSで公開している量はこの十年間で以前とは比較にならないほどに増加しているのだから。

著作権の有効期間が終了した著作物はただで読まれるのが当然となっても特別おかしいことではないのである。

著作権者自身による無料での公開

三年前に当時の日本におけるマンガ論の状況について概説したことがある⁽⁴⁾。その中で「ネット上でマンガに関する言説・議論が盛んに取り交わされ」「既にジャーナリズム・アカデミズムで評論・研究を行っている人が即時性のあるメディアとしてネット上の「ブログ」を活用していたり、ネット上に載せていたマンガ論がきっかけで新聞・雑誌などのマスメディアに書く機会を得た人がいたり、既にネット上のマンガ言説は既存の出版・研究と連携し」ており、「ネット上に存在するマンガについての言説を無視してマンガ論を書くことはもはやありえない」ということを書いた。この状況は、既にマンガ以外のジャンルに関しても広がったと言っているだろう。

ここで冒頭の「文章」と、「文学」と「思想」という言葉の使い分けに戻る。パソコンや携帯電話を端末にして読めるインターネット上の無料の文章——小説・戯曲・詩歌のようなフィクションだけではなく、様々な文化・芸術・文学ジャンルについての批評・レビュー、哲学書・思想書についての考察、社会現象についてのコメントなど多岐にわたる——を「文学」と「思想」と呼ぶことを承認にするかどうかはおそらく人によって意見が分かれるところだろう。編集者・出版社の目を通さずに公開されているものなど、絶対に認められないという人が一方の極と考えられ、もう一方の極には文章として読めるのであればすべて認めていいという人がいると考えられる。実際は一律には決められず一つ一つの内容によって判断・選別せざるを得ないという、穏健な判断を取る人が多いのではないだろうか。

実はこのあたりの評価の分かれ方は代金を払って読める文

章とあまり変わっていないようにも思える。書籍や雑誌に収められている文章でも、「文学」や「思想」と呼べるかどうかは一つ一つ確かめるしかない、ということでは同じだからだ。編集者・出版社を全面的に信用している人も、頭から疑ってかかっている人もおそらく少ないだろうから。

現在、プロの書き手（作家・評論家・ライター・学者・書評家といった肩書の違いはあれ、文章を書くことで収入を得ている人をすべて含むと考えていただきたい）が書く、ただで読める文章は夥しい数と量にのぼる。特に無料のブログやSNSのサービスが普及した後では、あえて年齢で切れば二十代から四十代の書き手では、ただで読める文章をネットで公開していない人の方が少ないのではないかと思えるほどである。

八十才を過ぎてから自らの小説・エッセイといった文学作品をネット上に公開する作家もいるので、本来自らの文章をただで読ませるということと年齢は関係ないのだろう。しかし、若い書き手がブログやSNSで文章を公開することを通して、自らの名前を広めるということは当然のこととなっている。また、そういう書き手同士がコメントやトラックバックやリツイートといった機能を使って、お互いの書いた文章を参照し合うという協力も特に違和感なく受け入れられている。コメントのやりとりが論争的に発展していくこともあるが、その「論争」がまた紹介されていくことでより広い範

囲に書き手の存在が認知されることにもなっている。

また、著作者自らが公開しているものには、「2ちゃんねる」のような匿名掲示板で読むことができるものもある。もっとも匿名なので著作者というのは違和感を伴うところで、実際これまで述べてきたブログやSNSよりも自由に匿名掲示板の文章はネット上で流通させられている。たとえば、「2ちゃんねる」では、日々大量の文章が投稿されログ化されている上に、様々な（まとめサイト）によって読みやすく編集され、それがブログやSNSでリンクされさらに多くの読者の目にふれるようになっていく。様々な発言のつらなりがノンフィクションかフィクションかという境を意識されずに読まれている。また、一つの書きこみがショートショートやコラムのように——これもまたジャンルなど意識されずに——読まれ、かつ（ヘコピペ）として複製されて多くの読者を得ている。

「2ちゃんねる」に書かれているものこそネットに書かれている文章の中でも特別に排除すべきものと考えている人もいるかもしれない。しかし、有料で読める文章でも、実際には多くの出版物の中から読むに値するものを見つけ出さなければならぬ。様々な書き手による大量の書きこみが石ばかりで玉が全くないということは考えにくく、あとは優れた文学や思想を夥しい文章の中から見出すことが困難であるという問題があるだけである。前記の（まとめサイト）や（ヘコピ

ペ）はその問題を解消するものの一つである。

ただ「2ちゃんねる」を由来とするインターネット全般についての否定的なイメージは簡単には払拭されないだろう。しかし、顕名にせよ匿名にせよインターネットで文章を公開することで多くの読者を得られることや、大きな時差なく読者の反応を得られることは重要だろう。雑誌や書籍に発表する前のプロトタイプをインターネットで公表し、読者のコメントから修正を与えていくことも可能である。もちろん読者の否定的な反応に耐えられない恐れもあるのだが。

無料から有料へ

ネット上の表現者たちは、出版社を通して、また自らが編集する同人誌によって、代金を取って売る文章を書き続ける一方で、そのエッセンスをネット上で無料で公開する、という使い分けをするということが多くなっている。また無料のブログを有料のメール・マガジンを読ませる方向に導くためのツールとして利用するのも企業・個人を問わず多い。有料の文章を売るための無料の文章自体は、インターネット以前でもたとえば各出版社のPR誌などで読むことができた。ただ、かつてのただで読める文章が量的に制限があったのに対して、現在は量的に制限が無く、有料の原稿と区別ができなくなっている。時に有料で手に入れた文章を読んでも、無料で読んだ文章をいくらか精密に書き直しただけということが起ってしまうようになっていく。

この無料から有料へと導く、宣伝としてのブログやSNS

の利用法は、特別文学や思想の分野にだけに限ったことではない。科学・政治・経済・法律など、あらゆる分野の専門家が、それぞれの分野についての知識をただで知ることができるようになった、自らの有料の著述へと読者を導いている。

もちろん、書店で実物を見かけたり、新聞や雑誌の広告・書評を読んだりしたことがきっかけで、代金を払って雑誌や書籍を読むだけの読者は今も多いだろう。逆に無料の文章を読むだけで、有料の文章を読まない読者もいるだろう。しかし、若い書き手にとってこの無料から有料というモデルは、現在もとても信頼のおける有料の読者を得るための道に感じられているのではないだろうか。おそらく雑誌や書籍を編集・出版する側の人々も、ネットでの読者の掘み方を若い著者の文章を出版するか否かを判断する際の判断材料としているのではない。

ところが、この無料で読める文章が大量にあるという状況は、プロの書き手の地位を安泰にするのとは逆の方向性も持っている。なぜなら、プロの書き手以上にアマチュアが書くただで読める文学や思想がネット上には夥しい数量で公開されているからである。

たとえば、あるジャンルに非常に詳しいアマチュアが書いた文章——それを研究や批評と呼びたいと思う——が同じジャンルのプロの書き手の文章よりもいつも明らかに劣っているとは言えないはずである。自らの無知をさらせば、詳しく

ないジャンルについてブログで多くを学び、その書き手について知ってみると、それについて研究することで生計を立てているのではない、あえて言えば趣味としてそのジャンルについて調べている人であるということが多々あった。そういったアマチュアの書き手がブログで多くの読者を得て参照されることで、出版社から著作を出し収入を得るようになることもあるので、アマチュア／プロフェッショナルの境界線を引くことが実は難しい。しかし、それは既に文章を売ることができるようになったプロの書き手が常にアマチュアによっておびやかされている、という状況を示している。実際、さきほどふれたプロの書き手のブログでの〈論争〉にアマチュアが参加してプロと遜色なくやりとりをするのは珍しいことではない。

おそらく今後も文学や思想にかかわる業界が、ネットから新たな書き手を見出していくという流れがとどまることはないだろう。しかし、自分の書いた文章を有料で読ませる必要を感じる書き手が今後も存在し続けるかどうかはわからない。もしかするとそういう書き手の存在の仕方は主流でなくなるかもしれない。

もっとも、今のところただで読める文章を公開している優れたアマチュアの書き手であっても、学ぶ際には代金を支払って書籍や雑誌を購入する必要がある。つまりインターネットで公開されている文学や思想が、インターネットの外の有

料の文学や思想に依存していることは認めざるを得ない。しかし、ネット上でのみ活躍する優れた書き手が増えていき、かつパブリック・ドメインがより利用しやすい形式を確保していけば、ただで読める文章から学ぶだけで優れた書き手になることも可能になるかもしれない。そうした時により多くの人に読まれる可能性を捨てて、代金を支払わなければ読めない閉ざされたところに自分の書いた文章を載せることを選ぶ書き手がどのくらいいるのだろうか。

もちろん、自身の書いた文章で直接利益を得ることを優先する価値観は根強く続く可能性もあるのだが。

著作権を前提としないなら……

これまで書いてきたことはすべて、著作権は社会に必須のものであり、今後も維持・保護されていく必要がある、という前提に立ったものである。著作者の権利、特に著作（財産）権を尊重することは、近代社会、いいかえれば資本主義の社会では自明の前提となっている。著作物は著作者の私有財産であり、著作者はそこから得られる利益を独占することができる。この権利によって、たとえば出版界への参入者は絶えることなく生まれ続け、出版資本主義は成り立ってきたわけである。

一方、近年通信技術・複製技術の進歩にともなって著作権についての見直しの必要を問う意見が多く見られるようにな

つてきている。その議論自体は著作権の必要性を自明のものとするものなのでここでは問題としない。はたして著作権の尊重は絶対にゆらぐことのない価値観なのか、ということを考えてみたい。

そこで召喚するのがロラン・バルトのエッセイ「作者の死」(一九六八年)である。このエッセイはそのタイトル自体が文学用語となり、また〈テキスト〉という概念と共に有名であるが、そのわりに提唱されている価値観が広く浸透しているとは言い難い。

増田聡はこの「作者の死」でいう「作者」の機能を分類し、かつロラン・バルトへの批判を行っている(3)。「バルトにとつての「作者」概念の持つ特徴」は「1 作品を生みだし(それを生産し)」、「2 その作品を所有し(著作権などの社会的制度が所有を保証する)」、「3 唯一の「人格」あるいは「内面」を作品に投影する(常と同じ唯一の人間が《打ち明け話》をする)。」に分類でき、「バルトの言う「作者の死」で真に死んだのは、この(3)の作者であったことが了解される」という。「彼の主張する「読みの権利」の為に死ぬべきであったのは」「読者の行う読みの操作を抑圧する批評的観点」だけなのだ、と。

確かに「作者」の初めの二つの機能、「作品を生みだし」「その作品を所有」する、ということについては否定できないというのが穏健な立場だろう。特に(1)と(2)を手続き無

しで直結させるという前提が、広く現代の表現に関する領域を支えている。しかし、「作者の死」には以下のような箇所もある。「それゆえ文学の領域において、資本主義イデオロギーの要約でもあり帰結でもある実証主義が、作者の《人格》に最大の重要性を認めたのは当然である。」(3)

「実証主義」と「作者の《人格》」を結ぶ、「資本主義イデオロギー」。「作者の死」とは「作者」の存在を下支えしている「資本主義イデオロギー」についての「死」を告げているということはないのだろうか。それに伴い(1)と(2)の「作者」もまた「死」が宣告されていると考えることができる。(1)の「作品を生みだし」す機能については、〈テキスト〉概念によるオリジナリテイの相対化による「死」が待っている。誰も新しい「作品」を生みだすことなどできない。

そして、ここまで述べてきた文脈で重要なものは(2)の「作者」の機能の「死」である。〈テキスト〉に「オリジナリテイ」がないのなら、それを私有して得られる利益を独占する者など存在するわけがないことになる。あらゆる表現は、人間の共有財産である表現から生みだされ、新たな表現も無条件で共有されなければならない。全てが初めからパブリック・ドメインであり、あらゆる利用がフェアなものとなる状況が想定できる。そこでは書かれた文章は商品ではなく、贈与物として互酬の対象となる(3)

もちろん、こんな状況が私有財産を認めることを大前提と

する資本主義社会で成り立つはずはない。しかし、私有の否定／肯定の間の妥協的な枠組みとしてプログラムの領域を起源とする「コピーレフト」(たとえばGNU)や「クリエイティブ・コモンズ」といった試みがなされている。法的に著作(財産)権が保証されている期間内でも、たとえば商品としての賞味期限が切れた著作物を公開する——「テキスト」として言葉の中に戻してやる——ことは十分に考えられる。

前に述べたように、広告・宣伝によるビジネスが前提となっているただで読める文学や思想は今後維持ができなくなるかもしれないが、その混乱の中でまた別の前提に基づいて文学や思想がただで読めるようになるかもしれない。

ゾーニング

有料でしか、文学・思想に接することができなかった以前の状況は現在明らかに変化してしまっている。新聞・雑誌・書籍といった有料の文章を読まなくても、文学・思想についての関心をかなり満足させることができる。新聞・雑誌・書籍を代金を支払って読もうとする人が減っているという現状を否定し嘆くことも、無批判に受け入れることもしないとするれば、かつては新聞・雑誌・書籍でしか得られなかった情報を新聞を読まずとも情報を得られる手段を組み立て伝える方が良いのだろう。現状の無料で読める文学・思想が不十分な

ものであるなら、多くの人が読むべき重要な文学・思想が無料で読めないことの方を問題視するということもできるのである。少なくとも既にパブリック・ドメインになっている文学・思想がすべてネット上にデータとして公開されていれば、それだけでもかなり多くのことを学ぶことができる。実際は膨大すぎて一人の人間が読むのも困難な量になってしまいうだろうが。

今後自身も書いた文章を有料で読ませることで生活を成り立たせることを望む人たちはいるだろうから、それまでを変える必要はない。ただし現在よりもさらに手軽に多くのただで読める文学・思想がある中で、自らが著作権を有する文章を有料で読ませるのには、より大きな困難が生じることは予測できる。たとえばクリエイティブ・コモンズとして旧作を公開することで固定的な読者を得、その読者に対して新作を有料で販売する、という手段が考えられる。読者が旧作として公開されるのを待ち続けずに、新作に代金を支払うかどうかはお手並み次第というところだ。

既にこの点に関しては今後の経済のあり方を「商業経済」と「共有経済」とを分け、両者の混交した「ハイブリッド経済」を提唱するローレンス・レッシングの提案がある(10)。ただ、これまで繰り返してきたように、今後は無料のものだけを享受する人々と有料のものを享受できる人々の間のゾーニングがより強化されていき、「リミックス」は一部でしか生

じない可能性もある。

冒頭で述べておいたように、ただで読める、と感じられている文章は厳密にはただではない。そして、それらにアクセスできるインフラを得るための経済力を持たない人々もいるのである。そのうち有料の文学や思想は人を選別する新たな教養になるかもしれない。代金を支払って読める／ただのものしか読めない／何も読めない、という境界線によるゾーニングが行われるわけである。しかし、文学や思想はただで読めるものである——読めなければならぬ——という認識が広まっていれば、そのような差別化に貢献することは避けられるかもしれない。残るのはインフラの有料／無料という境界線なのだが、それについては今まで述べてきた範囲を超えるので、ここで擱筆することとしたい。

注

- (1) パソコン通信や九十年代のインターネットについては、ばるばら『教科書には載らないニッポンのインターネットの歴史教科書』翔泳社、二〇〇五年、を参照。
- (2) たとえば日本経済新聞の有料化の案内は以下のページを参照のこと。
<http://www.nikkei.com/guide/> また日本に先行して新聞社が経営するニュースサイトの有料化の動きのあるアメリカの状況については鈴木伸元『新聞消滅大国アメリカ』幻冬社新書、二〇一〇年、に詳しい。
- (3) パソコンで利用できるものとして、たとえばポイント・アップ株式会社の Digishelf がある。
- (4) 「論じたくてしかたのないあなたへ——マンガ論の過去と現在——」『近畿大学日本語日本文学』9、二〇〇七年。引用は六頁と十頁による。
- (5) 「大西巨人／巨人館」はブログやSNSが盛んになる前、まだいわゆる〈ホームページ〉が主流だった二〇〇〇年に開設されている。また、このサイトに連載されていた「深淵」が書籍化された（光文社、二〇〇四年）のは後で述べる無料から有料というモデルにもつながっている。
- (6) なお「2ちゃんねる」の「使い方&注意」という利用規約にあたる文言には著作権に関する記述はない。
- (7) 『その音楽の〈作者〉とは誰か リミックス・産業・著作権』みすず書房、二〇〇五年。引用は一八二頁と一八五頁による。
- (8) ロラン・バルト「作者の死」一九六八年。引用は『物語の構造分析』

(花輪光訳) みずず書房、一九七九年、八十頁による。

- (9) 「贈与」「互酬」の用法については、柄谷行人『世界史の構造』岩波書店、二〇一〇年、による。

- (10) ローレンス・レッシング『REMIX ハイブリッド経済で栄える文化と商業のあり方』(山形浩生訳) 翔泳社、二〇一〇年。なお、文学・思想とパブリック・ドメインや「クリエイティヴ・コモンズ」との関係については、『FREE CULTURE いかに巨大メディアが法をつかって創造性や文化をコントロールするか』(山形浩生・守岡桜訳) 翔泳社、二〇〇四年、の方で詳しく述べられている。

本文中で言及したサイト

mixi

<http://mixi.jp/>

Twitter

<http://twitter.com/>

青空文庫

<http://www.aozora.gr.jp/>

プロジェクト杉田玄白

<http://www.genpaku.org/>

Gutenberg Project

<http://www.gutenberg.org/>

GNU

<http://www.gnu.org/home.ja.html>

クリエイティヴ・コモンズ

<http://creativecommons.jp/>

日本経済新聞電子版利用ガイド

<http://www.nikkei.com/guide/>

DigiShelf

<http://www.point-at.co.jp/products/digishelf.htm#bookviewer>

「論じたくてしかたのないあなたへ——マンガ論の過去と現在——」

<http://homepage1.nifty.com/tkuwabara/study/pdf/mangaron.pdf>

大西巨人／巨人館

<http://www.asahi-net.or.jp/~hh5y-szk/onishi/kyojin.htm>

2ちゃんねる「使い方&注意」

<http://info.2ch.net/guide/>